

研究テーマ	内 容	発表方法, 媒体 (研究誌名, 研究会等 名)
「昭和の桃山復興—陶芸家と近代」	昭和初期の陶芸家たちの桃山復興への取り組みを紹介し、近代の陶芸家たちにとって、過去の作品を手本としつつも、創作的な活動として陶芸の制作に取り組むことがどのような意味を持つのか、またそれが日本の近代の陶芸史にどのような意義を持つのかを検討した。	『東洋陶磁』第35号、2005年度内刊行予定
「アール・ヌーヴォーと日本の近代陶芸」	20世紀初頭の日本におけるアール・ヌーヴォーの受容が、日本の工芸史およびデザイン史上においてどのような意義をもつかを検討した。	東洋陶磁学会平成17年度第2回研究会、2005年10月
「日本のアール・ヌーヴォー1900—1923:『新しい芸術』としての工芸」	20世紀初頭の日本におけるアール・ヌーヴォーの受容と展開を整理し、日本の工芸史およびデザイン史上における意義を明らかにした。	『日本のアール・ヌーヴォー1900—1923:工芸とデザインの新時代』展図録、東京国立近代美術館、2005年
「アール・デコと日本の工芸——『構成派』と呼ばれた工芸家たち」	1920年代のアール・デコの時代、海外の新しいデザインの潮流を受け止めた日本の工芸家たちの活動を紹介し、その意義を明らかにした。	『アール・デコ展——きらめくモダンの夢』展図録、読売新聞社、2005年
「昭和の桃山復興(五)『織部的なもの』と近代の陶芸」	昭和初期の陶芸家たちの桃山復興への取り組みを、陶磁史の形成という観点から検討し、過去の作品を手本にすることと作家としての創作性との問題点を検討した。	『陶説』第622号、2005年1月
「工芸における現代化過程—大正期から戦後にかけての動向:工芸における『伝統』」	戦前期の工芸界においては伝統的であることは批判の対象であったが、戦後になると伝統的であることに価値と意義が見出されるようになる。このような変化がどのようにして生じたのかを検討し、問題提起した。	シンポジウム「工芸—歴史と現在」、東京都現代美術館、2005年2月
「昭和の桃山復興(四) 北大路魯山人—鑑賞と創作—」	北大路魯山人は陶芸の制作にあたり、さまざまな古陶磁や陶片を収集して制作の参考としていたが、古陶磁を鑑賞し、それを創作に活用することについて魯山人がどのように考えていたかを紹介し、検討した。	『陶説』第610号、2004年1月

「作品研究 杉田禾堂《用途を指示せぬ美の創案》を発表したことをきっかけに巻き起こったさまざまな論争を紹介し、当時の工芸家や評論家たちの工芸観を探った。」	杉田禾堂が《用途を指示せぬ美の創案》を発表したことをきっかけに巻き起こったさまざまな論争を紹介し、当時の工芸家や評論家たちの工芸観を探った。	『現代の眼』第544号、2004年2月
昭和の桃山復興 (Modern Revival of Momoyama Ceramics)	昭和初期の陶芸家たちの桃山復興への取り組みを紹介し、近代の陶芸家たちにとって、過去の作品を手本としつつも、創作的な活動として陶芸の制作に取り組むことがどのような意味を持つのか、またそれが日本の近代の陶芸史にどのような意義を持つのかを検討した。	シンポジウム「日本の陶芸：文化的源泉と現代の表現」、ハーバード大学、2004年11月 (Symposium, Japanese Ceramics: Cultural Roots and Contemporary Expressions, Harvard University)
「昭和の桃山復興—陶芸家と近代」	昭和初期の陶芸家たちの桃山復興への取り組みを紹介し、近代の陶芸家たちにとって、過去の作品を手本としつつも、創作的な活動として陶芸の制作に取り組むことがどのような意味を持つのか、またそれが日本の近代の陶芸史にどのような意義を持つのかを検討した。	東洋陶磁学会第32回大会、2004年12月
「あかり：イサム・ノグチが作った光の彫刻」	彫刻家イサム・ノグチがデザインを行った「あかり」について、その発想の原点から、それが実現するまでを紹介し、ノグチにとって「あかり」の仕事とはどのような意味を持つものだったのかを検討した。	『あかり：イサム・ノグチが作った光の彫刻』展図録、東京国立近代美術館、2003年
「昭和の桃山復興—なぜ、陶芸家は桃山にアこがれるのか？」	昭和初期の陶芸家たちは桃山時代の作品を手本とし、創作的な制作活動を繰り広げていったが、陶芸家たちが桃山陶芸に注目した理由を、昭和初期の古陶磁に対する関心の高まりや古い窯址の発掘ブームといった古陶磁をめぐる当時の状況に探った。	東洋陶磁学会平成15年度第8回研究会、2003年12月
「川喜田半泥子〈志野茶碗「赤不動」〉について」	素人として作陶に取り組み、数多くの茶碗を制作した川喜田半泥子の作陶に対する考え方を紹介し、《志野茶碗「赤不動」》の制作の背景とその位置づけについて検討した。	『東京国立近代美術館研究紀要』第7号、2002年
「昭和の桃山復興：陶芸近代化の転換点」	昭和初期の陶芸家たちは桃山時代の作品を手本とし、創作的な制作活動を繰り広げていったが、彼らの昭和初期から戦後にかけての時期の動向を探り、その近代の陶芸史上における意義を検討した。	『昭和の桃山復興：陶芸近代化の転換点』展図録、東京国立近代美術館、2002年

「昭和の桃山復興(三) 備前・金重陶陽」	昭和初期に岡山県備前で桃山復興に取り組んだ金重陶陽が、なぜ桃山時代の備前焼に注目するようになったのかを調査し、検討した。	『陶説』第586号、2002年1月
「『昭和の桃山復興』展—美濃と備前での展開—」	昭和初期に桃山時代の陶器を手本として陶芸制作に取り組む陶芸家が、美濃地方と備前地方で現れるが、それぞれの地域においてどのような展開を示したかを整理し、紹介した。	『陶説』第594号、2002年9月
「陶芸家たちの桃山復興」	昭和初期の陶芸家たちは桃山時代の作品を手本とし制作活動を繰り返していったが、陶芸家相互の交友と影響関係を探り、その展開を紹介した。	『淡交』第690号、2002年9月
「昭和の桃山復興(二)」	昭和初期の陶芸家たちによる桃山復興への取り組みと、昭和初期の帝展における古典派と呼ばれた工芸家たちそれぞれの歴史研究と創作との関係について検討した。	『陶説』574号、2001年1月
「陶磁器のジャポニスム—フランス・ドイツを中心に」	19世紀後半のフランスとドイツにおいて、日本の陶磁器がどのような影響をおよぼしたかを調査した。	東洋陶磁学会平成12年度第9回研究会、2001年2月
「19世紀末ドイツにおける日本のやきもの」	19世紀後半のドイツにおいて、日本の陶磁器がどのような影響をおよぼしたかを調査した。	『ドイツ陶芸の100年：アール・ヌーヴォーから現代作家まで』展図録、2000年
「昭和の桃山復興」	昭和初期、桃山時代のやきものに憧れをいただき、その再現に取り組む陶芸家が日本各地であられるが、その背景となった古陶磁に対する関心の高まりを調査し、検討を加えた。	『陶説』562号、2001年1月
「荒川豊蔵の桃山復興：桃山陶芸の再評価から伝統の形成へ」	昭和初期に桃山時代の志野焼に注目し、その再現に取り組む荒川豊蔵の作品の変遷を紹介し、荒川独自の表現を確立するにいたるまでの作品の変化とその背景を検討した。	『東京国立近代美術館研究紀要』第6号、2000年12月
「加藤土師萌」	陶芸家加藤土師萌(はじめ)の生涯と作品について紹介し、近代の陶芸史上における位置づけを検討した。	『加藤土師萌展—近代陶芸の精華』展図録、東京国立近代美術館、1999年

「鈴木治のオブジェとクラフト―昭和30年代を中心に」	陶芸家鈴木治は、用途を持たない陶芸作品（オブジェ）を制作した陶芸家として知られる存在だが、その一方で、生活の中で使用する器（クラフト）の製作にも取り組んでいた。全く方向性の異なるオブジェとクラフトそれぞれに対する制作態度が、鈴木治の作陶に対する考え方のなかでどのように成熟していったかを検討した。	『鈴木治の陶芸』展図録、東京国立近代美術館、1999年
「[作品研究]富本憲吉《色絵草花文角鉢》、《色絵薊文角鉢》」	陶芸家富本憲吉が色絵磁器の技術をどのように研究したか調査し、それが作品にどのように反映されているか紹介した。	『現代の眼』第514号、1999年2月
「柳宗悦の民藝論における『用』について」	民芸運動の指導者柳宗悦の提唱した民芸論において、「用」をめぐる言説がどのように変化していったか調査し、柳の民芸論におけるもっとも重要なキーワードとも言うべき「用」という言葉の解釈について検討した。	『「かたち」の領分』展図録、東京国立近代美術館、1998年